

# 矢板 希望の星

かつて、矢板は林業の町として名をばせていた。

戦後の植林ブームによって植えられた杉・檜は六十年ほどの時を経て、立派な山林に育ってきた。

地元たかはら森林組合で、最前線の指揮を任されている小川さんは、矢板の山林を守る若き後継者の一人だ。

## ■収入の見込める山をつくる

森林組合の仕事は「組合員の山の管理を請け負い、将来的に収入を見込める山づくりをすすめる」ことだ。

組合員には、人それぞれに山づくりに対する思いがある。その要望を聞くために電話や、

今が一番楽しいですわね！

次世代に山の楽しさを伝え山を守ってもらいたい



小川智士さん (34歳)

たかはら森林組合・業務課主任として、8人ほどの作業班を任せ、営業的な仕事や作業計画づくり、実際の伐採作業の指揮までを行う。「最後に、きれいになった山を見るのが一番楽しいですね」と、現場を動かす面白さを感じている。

直接家を訪問して、コミュニケーションを密にとりながら山を調査し、整備を進め、良材の山を作っていく。

最近では、中国などの材木需要が増え、外材が入りつらくなってきたため、国産材が見直され始めている。

全国的に見て、矢板の山はなだらかなくとも多く、材を搬出しやすいのが利点だ。よそでは搬出コストの面で山に捨ててくるような細かい材でも、なるべく多くの材を搬出しお金を換えていくことが

できるという。実際に、今は太いものよりも、中程度の太さのものが需要が高い。地形に合わせた矢板の林業の形があって、このことを武器に戦っていきると考えている。

また、地元には大きな買い手がいることは非常に有利だ。(株)トーセンや、塩谷町の(株)渡辺製材所は、強力なパートナーとなっている。

世界的林業は高度な機械化が進んでいる。これからは、効率的な林業をめざして、矢板でもプロセッサなど機械の導入を進めて

## ■機械化を進めるために

世界の林業は高度な機械化が進んでいる。これからは、効率的な林業をめざして、矢板でもプロセッサなど

機械の導入を進めて

いくことが大きな課題だということ。そのためには、所有者の理解を得ながらの作業道の整備が必要だが、自分たちが植え付けをした人と、世代交代をした人とは意欲にかなりの温度差がある。そこをどう進めていくかも、小川さんたちの大きな仕事だ。

## ■アフリカゼミがきっかけ

大学で経済を専攻していた智士さん。そこに「アフリカゼミ」(ゼミ＝講座)という

のがあって、アフリカの農業や作物の育て方などを学んだり、アフリカのお酒を造ったり、

芳賀地区の森林組合で植え付けのボランティアをしたりと、アフリカだけにこだわらず広く自然との関わりを学んだ。

就職の時に、そのゼミの先生に相談、森林組合を勧められた。実家で子どもの頃から林業の手伝いをしていて慣れ親しんでいたこともあり、すんなりと決めたという。

東京で就職するという選択はなかった。都会は、たまに遊びに行ければいい、就職するならば地方が良いと思っていたからだ。新幹線通学をしていた大学の二年間、そこで出会うサラリーマンを見ていて、息苦しさを感じていたのもその理由の一つだ。

自然だけではなく人との関わりが作業員の中には、自然にそこが都会から来る人もいる。しかし、人間関係のギャップを感じて辞めていく人も多いという。

山の仕事は人との関わりが少ないように見えるが、実際にはいろいろな人と関わりを持つ。

「山がきれいになって、ものすごく感謝されたり、困ったときに名指しで仕事を申し込まれたり、仕事を通して、人と出会える楽しさがかかるようになったので、今は積極的に関わるようにしています。ただ、材木は市場の変動が大きいので、あまり調子の良いことを言わないように心がけています」と、明るく話します。



## ■夢は自分で植えつけた山を残すこと

塩田の実家の十五町歩の山の管理もしている智士さん。

「全伐して、自分の代で植え付け、手入れをして、後の代に残す山を作りたいですね。自分が仕事を辞めた後の楽しみにもなりますし、手塩にかけた山というものを作ってみたい。」

そして、できれば、結婚して自分の子どもができたら、連れて行って山の楽しさを伝え、子どもにも山を守ってもらいたいと思っ

ています。代々守ってきたものだし、微々たるものでも山を持つていけばいざとなったときに助かると思うから……」

## ■自然と共存できるまちづくりを

矢板産材の魅力は目の話だった、きれいな良い材であることだ。問伐が他の地域に比べて進んでいるからこそ、クオリティーの高いものが生産されている。

この、品質が良くてコストも安い地元産材を、公共の建物などに優先的に使うことに助成をしたり、製材の過程で出る残材を利用してパイオオマスの充実を図り、温泉や公園などに使うなど、木材という矢板の財産を生かして、自然と共存したまちづくりが進むと良い

など考えている。